現地からの声

1　はじめに

３月に国連ネパール政治ミッションの軍事監視要員として派遣されてから、早８か月が過ぎようとしています。今回は、勤務を通じ私が経験したこと・考えたことなどをご紹介したいと思います。

2　ネパールの第一印象

ネパールの空の玄関口であるトリブバン国際空港の第一印象は「小さいな」でした。日本で言えば、地方空港程度の規模です。また荷物の受け取り場所に行ってもなかなか自分たちの荷物が出てきません。荷物を運んでくるベルトコンベアが頻繁に停止するためです。ここで早くも嫌な予感がしました。この国では何事も予定通りにいかないのではないか・・・と。残念ながらその予感は当たっていました。１時間近く待ってようやく荷物を回収し、迎えの車に乗って街に出ると、３月のカトマンズは乾燥していて埃っぽく、何というか異様な雰囲気です。「これはとんでもないところに来たぞ」と正直思いました。空港の周りには鉄条網が張り巡らされ、武装した兵士が警戒ポストで監視についています。ネパールがつい数年前まで内戦状態であったことを改めて実感する風景でした。

3　ＭＣＳ（マオイスト・キャンプ）での勤務

約１週間の本部での導入教育が終わって、私はＭＣＳ５（ロルパ）というところで勤務することになりました。カトマンズから西へヘリコプターで２時間ほどの丘陵地帯です。ロルパはカトマンズよりも高い場所にあるため、非常に涼しくて快適でした。ちなみに後日カトマンズに住んでいるネパール人から「ロルパってどんな所なの？」とよく聞かれるようになったのですが、つまりそれほどの「辺境」であり「ド田舎」であるというわけです。風車のない「●の谷 ©スタジオジ●リ」を想像していただければよいかと思います。

最初の同僚はヨルダン人とブラジル人でした。特にヨルダン人の英語は中東独特の訛りがあり、しかも早口なので、最初は非常に聞き取りづらく苦労しました。ブラジル人というと、私は最初、サッカーとサンバが大好きで、至極陽気な国民と勝手に思い込んでいたのですが、実際はまじめで、職務に忠実な人でした。彼は「ブラジル人と見ると皆サッカーの話をしてくるけど、俺は本当はバレーボールが好きなんだ。ブラジル＝サッカーという先入観は改めてもらいたいなぁ・・・」と本音をもらしてくれました。南米のサッカー王国も事情は複雑なようです。

ここでは日々のパトロールを通じて情報収集を実施しつつ、マオイスト第５師団の武器と兵員を監視するという任務を主に実施することになりました。

4　カトマンズでの勤務

ロルパでの半年ほどの勤務の後、カトマンズに所在するチャウニーというネパール国軍施設に配置換えになりました。チャウニーでの勤務はロルパと違ってパトロールもなく、３日間ひたすらパソコンを見つめているというものすごく単調な任務です。ただ任務が終わると、しば

らくカトマンズで過ごすことができます。

カトマンズではタメル地区という繁華街によく行きました。ここでは最初、乳飲み子を抱えた女性の物乞いから、「この子にミルクを買ってやってもらえませんか」とつきまとわれ、お断りするのが非常に心苦しかったのですが、よく観察していると、一仕事終えた彼女は何とタクシーに乗って堂々と帰宅していくではありませんか。そのたくましさに妙に感心してしまいました。またカトマンズはどこもそうなのですが、ゴミ箱がなく、みんな道に平気でごみを捨てています。夏場はかなりにおいがしてくるので、みんな顔をしかめて歩いていました。

今は観光シーズンなので、外国人が多いのですが、ネパール人は外国人に慣れていて、平気で話かけてきます。タメルにはあちこちにネットカフェがあり、誰でもコンピュータを使うことができます。また両替商もたくさんあり、世界中のお金を両替することができます。それから武装した警官が街のあちこちに立って見張っています。それまで私はネパールは暑くて、汚くて、貧乏で遅れた国だと思っていましたが、もしかしたら日本の未来の姿かもしれないと一寸思いました。

5　おわりに

最初は戸惑うことも多かったネパールでの勤務ですが、徐々に人情深いネパールの人々との触れ合いをかけがえのないものと感じるようになりました。また世界最高峰のヒマラヤをはじめとする美しい自然の景観や多くの宗教・民族が混在する独特の文化はとても魅力的です。今は少しでもこの国の人々が平和に暮らすお手伝いができればと考えています。最後に私の勤務の一端を紹介できる貴重な機会を頂いたことに感謝しつつ、筆を置きたいと思います。ありがとうございました。

平成２１年１１月６日

第３次ネパール国際平和協力隊員　１等陸尉　小川　哲

ヨルダン人の同僚とともに